

昭和初期の保育の実際に関する一考察

— 大倉邦彦の教育理念と特別活動的視点 —

大岡 紀理子

大岡ヨト

目次

はじめに

- 一 幼稚園創設期における保育内容
 - 二 大倉邦彦の略歴
 - 三 富士見幼稚園開設にあたって
 - 四 富士見幼稚園の理念
 - 五 富士見幼稚園の保育の実際
 - (一) 一九三八(昭和一三)年の保育の実際
 - (二) 一九四〇(昭和一五)年の保育案
- キーワード
- 教育者 母親教育 保育日誌

はじめに

本論文は、昭和初期の保育の実際に關して、戦前の中日黒に存在していた富士見幼稚園の創設者である大倉邦彦の教育理念を究明するものであり、その教育内容を特別活動的視点から考察するものである。

本来、「特別活動」とは小・中・高校における教科外活動である。特に小学校でいえば、学級活動、児童会活動、クラブ活動、学校行事から成り立つものとされるが、学校行事に代表されるような教育活動は幼稚園においても一定程度取り入れられている。さらに、教科外活動としての特別活動の歴史的変遷を追えば、一九四七（昭和二二）年の「自由研究」が現在の特別活動の原型になつたとされる。しかし、それ以前の明治後期から遠足や運動会などの学校行事は各学校において行われているため、理念としての特別活動的視点を昭和初期においても用いることは可能であると考える。

まず、本論文の対象となる時期の幼児教育の概略を押さえておきたい。日本における幼児教育としては、一八七六年（明治九）年に初めて東京女子師範学校附属幼稚園が開設された。主任保姆は松野クララ、保姆は豊田美雄と近藤浜であった。そして幼稚園の定員は約一五〇名であり、対象年齢は満三歳以上、満六歳以下の幼児で、保育時間は一日四時間であつた。保育内容としては物品科・美麗科・知識科の三科目であり、その具体的な内容はフレーベルの恩物・計数・説話などで構成されていた。つまりフレーベルの恩物を中心とした保育内容が大きな比重を占めており、子どもが教師の指示通り恩物の操作を行うものであった。

そして、幼稚園の数は一八八七（明治二〇）年に六七園、一八九八（明治三一）年には二三九園と増加していく、それに伴つて幼稚園を制度的に明確化することが要請されていった。そうした中で一八九九（明治三二）年には「幼

幼稚園保育及設備規程」が制定された。これにより、幼稚園は法的に整備されることとなり、幼稚園の教育制度の位置づけが明確になつたのである。この規定により、幼稚園への入園年齢は満三歳から小学校に就学する前までとされ、保育時間は一日五時間以内とされた。また、幼稚園の園児数は一〇〇名以下であり、特別な事情があるときは一五〇名までとされた。保姆一人当たりの幼児数は四〇名以下であった。そして、「遊嬉」「唱歌」「談話」「手技」の四項目が保育内容として定められた。この規定は、従来の多様な幼稚園教育の水準を一定に保つとともに、各地に幼稚園設立の機運を促進することとなつた。

一九二六（大正一五）年四月二二日、幼稚園単独の勅令である幼稚園令が制定された。幼稚園数は一九二六（大正一五）年には一〇六六園となつた。幼稚園令は、幼稚園の目的を「幼稚園ハ幼児ヲ保育シテ其ノ心身ヲ健全ニ発達セシメ善良ナル性情ヲ涵養シ家庭教育ヲ補フヲ以テ目的トス」と記している。つまり、幼稚園の目的を明確に示しているのである。そして、「善良ナル性情」を涵養することが定められることにより、広く人間性の基礎を培うことが望まれるものとなつてゐる。幼稚園令の制定を機に、幼児教育は中流以下の子弟にまで対象を拡大していったのである。

戦前の幼稚園教育の先行研究としては、湯川嘉津美著『日本幼稚園成立史の研究』（一九〇一年、風間書房）がある。本書では戦前日本の幼稚園設立における歴史が具体的史料とともに分析が行われている。また日本保育学会編『日本幼稚園保育史』（フレーベル館、一九六八年）がある。さらに倉橋惣三・新庄よしこ著『日本幼稚園史』（臨川書店、一九三〇年）、岡田正章著『日本の保育制度』（フレーベル館、一九七〇年）、国立教育研究所編刊『日本近代教育百年史』（国立教育研究所、一九七四年）、文部省編『幼稚園教育百年史』（ひかりのくに、一九七九年）などがあるが、これらは通史にすぎず、具体的な保育内容に関して言及したものではない。そのため本論文では、特別活動的視点を取り入れながら昭和初期の保育内容及び保育の実際に関する具体的な保育内容について分析を行いたい。

ところで、二〇〇八（平成二〇年）の小学校学習指導要領において、特別活動の目標として「望ましい集団活動を通して、心身の調和のとれた発達と個性の伸長を図り、集団の一員としてよりよい生活や人間関係を築こうとする主旨的、実践的な態度を育てるとともに、自己の生き方についての考えを深め、自己を生かす能力を養う」とある。このような視点からの教育活動は、富士見幼稚園においても積極的に隨時取り入れられており、特に、子どもたちが創意工夫しながら行動したり、目標を達成したり、仲間同士で助け合いながら体験的な活動をしたりするような主体的で自由な教育活動は、富士見幼稚園で実践されていた活動である。富士見幼稚園における教育活動の具体例としては、遠足や運動会などの他、入学式や卒業式、始業式、終業式、朝会といった儀式的行事や七夕やひな祭りといった文化的行事などであり、定期的に行われていた。また、一九四二（昭和一七）年の年中行事をみてみても、八月の夏休み以外は毎月行事が設定されており、幼児期においても行事から学ぶことが多くあると富士見幼稚園では考えていたと推察できる。

以上のような観点を通して、本論文では富士見幼稚園を中心事例として、昭和初期における幼児教育の実際を考察したいと考える。

本論文の構成は、まず富士見幼稚園が開設された大正期の日本の幼児教育を概観し、次に大倉邦彦がなぜ幼稚園をつくるとしたのか、大倉の略歴と共に富士見幼稚園の設置について明らかにする。そして、実際の富士見幼稚園ではどうのような保育が行われていたのかを分析する。最後に大倉が教育をいかに大切に考えていたのか、母親学級である富士見学びの会や卒園生を対象とした教育活動である富士見日曜学校の分析も行い、大倉の教育に対する考え方を明らかにする。

一 幼稚園創設期における保育内容

学校教育制度が形式的、実質的にも整つてきたこの時代は、大正デモクラシーの息吹く時代でもあった。民主主義や自由主義の思潮が教育界にも濃くなり、新しい教育実践が試みられるようになつた。日本の教育の中でも児童中心主義の教育の在り方が模索され、子どもの個性、自発性の尊重を強調するといった教育運動が展開された。このような流れは幼稚園教育にも影響を及ぼしたと考えられる。

創設期の幼稚園の対象児童としては、東京女子師範学校附属幼稚園の規則第二条に「小児ハ男女ヲ論セス年齢満三年以上満六年以下トス 但シ時宜ニ由リ満二年以上ノモノハ入園ヲ許シ又満六年以上ニ出ツルモノト雖モ猶在園セシムルコトアルヘシ」とあることから原則満三歳以上満六歳以下であったことがわかる。また、保育時間に關しても、第十条に「小児保育ノ時間ハ毎日四時トス 但シ當分ノ間保育時間内ト雖モ小児ノ都合ニ由リ退園スルモ妨ケナシトス」とあり、一日四時間であったことがわかる。

前述したように、幼稚園創設期において行われていた保育内容は物品科・美麗科・知識科の三科目とそれに含まれる「五彩球ノ遊び、三形物ノ理解、貝ノ遊び、鎖ノ連結、形体ノ積ミ方、形体ノ置キ方、木箸ノ置キ方、環ノ置キ方、剪紙、剪紙貼付、針画、縫画、石盤図画、織紙、畳紙、木箸細工、粘土細工、木片ノ組ミ方、紙片ノ組ミ方、計数、博物理解、唱歌、說話、体操、遊戯」の二五の子目で構成されていた。⁽¹⁾ この子目はほとんどがフレーベルの恩物で占められていた。当時、保育の中心を占めていた恩物は、『幼稚園』や『幼稚園法二十遊嬉』などの外国の翻訳書を参考にして、フレーベルの定めた順序通りに行われていた。当時の東京女子師範学校附属幼稚園の保育の実際をみてみると、ひとつつの活動を二〇～三〇分で行い、鐘の合図で行動していたことがわかる。⁽²⁾ そして毎日ほぼ同じ活動を繰り

返し、一日の保育時間を三〇～四五分程度に区切り、各項目を幼児に一斉に与えるという形式で行われていた。すなわち、小学校のように保母の指示に従つて時間通りに保育が展開されていったのである。そのため、幼児の自発性に基づく取り組みは少なかつたと考えられる。

このように保育課程に恩物が重視されていたが、恩物の中には幼児の生活に適さないもの、難しそうるもの等があり、保母の間でも恩物の効果に対しても疑問が生じてきていた。また、恩物の与え方に関しても、幼児期の心理に合わないのではという疑問も湧いてきた。そして、一八八一（明治一四）年の改正でいくつかの恩物の項目が取り除かれた。このように恩物中心の保育が批判され、和田実の「生活保育論」や倉橋惣三の「誘導保育論」などの実践が試みられた。さらに大正時代にモンテッソーリの考案した教具が保育界に紹介され、保育界に新しい教育の方法が現われることとなつた。そうした流れから恩物に対する評価は次第に低くなり、一八九九（明治三三）年に制定された「幼稚園保育及設備規程」では、「遊嬉」「唱歌」「談話」「手技」の四項目が保育内容となつた。そして「手技」の中に恩物が含まれるという形になつた。

このように、明治末期になると欧米の児童中心主義保育、統合主義保育といった新しい保育の影響やそれまでの保育実践の経験、反省の積み重ねにより、次第に新しい試みが取り入れられるようになつた。つまり、保育項目を小学校の教科のように画一的に時間を区切つて行うのではなく、子どもの生活から出てくるものを統合して保育を行つたり、子どもの自発的な活動を重視したりしたのである。例えば、口語の歌が作られたり、粘土細工などでは手工で模擬的な工作から次第に自由製作が行えるようになつたり、各保育室に人形を備えてままで遊びが自由に行えるようにしたり、子どもたちが採取した石や貝、草などを標本箱に整理、保存して観察に備えたり、といった新しい試みが取り入れられた。

一九〇四（明治三七）年には京都、大阪、神戸の保母の提携で「京阪神連合保育会」が開かれ、保育事項に関する研究会を行つてゐる。⁽³⁾ここでは、「保母が幼児の生活を殺すことがないようにななければならない」というテーマを掲げてゐる。その内容として「唱歌遊戯」を挙げてゐる。従来、唱歌と遊戯は時間を分けて保育をしていたが、「談話あるひは会集にあるひは遊戯に時々必要に応じて唱はしむるを適當と思考」として、談話や会集、遊戯の際に必要に応じて歌い、唱歌遊戯という形でその材料として適しているものを挙げてゐる。つまりお話を合間に歌を歌つたり、遊戯の際に歌を歌つたりすることができるような教材を紹介してゐる。こうした点は従来の画一的な保育というよりも、幼児の生活にそつた教材を準備し、季節等に合わせた形で保育を行おうとしていることが読み取れる。

そして一九二六（大正一五）年四月二二日「幼稚園令」が制定され、幼稚園は小学校とは別の幼児教育施設としての地位を確立した。幼稚園令では前述したように幼稚園の目的について示されており、保育内容については「幼稚園ノ保育項目ハ遊戯、唱歌、觀察、談話、手技等トス」とされ、「觀察」を加えて五項目とされた。この「觀察」は理科的な意味合いでなく、自然物や日常の物、人間に關することをありのまま觀察するという意味合いである。また、手技等の「等」ということは五項目に限定するのではなく、保育内容において自由に保育を行ふことの出来る余地を残しているものと考えられる。

当時の幼稚園数は年々増加の傾向にあり、一八八七（明治二〇）年では六七園であったものが、一八九七（明治三〇）年では二二一園、一九一七（大正六）年では六七七園、一九二六（大正一五）年には一〇六六園にも増加していく。そのような中、富士見幼稚園は、東京の中目黒に一九二四（大正一三）年に設立された。前述したように幼稚園は増加していくが、中流階級の子どもが通うと思われていた時代に、なぜ大倉は幼稚園を創設したのか。また幼稚園を創設した人物の教育理念とはどのようなものなのか。そして、どのような教育理念のもと、どのような教育が行わ

れていたのか。まず、富士見幼稚園の創設者である大倉邦彦がどんな人物であったのかを簡単に明らかにしたい。

二 大倉邦彦の略歴

大倉邦彦は、一八八二（明治一五）年四月九日に江原貞晴の次男として佐賀県神埼郡（現・神埼市）に生まれ、一九七一（昭和四六）年七月二十五日に八九歳で没するのであるが、まず、大倉邦彦の略歴についてごく簡単に述べておきたい。

大倉書店で成功した大倉孫兵衛が一八八九（明治二二）年、出版に必要となる洋紙を輸入する大倉洋紙店を開業したのであるが⁽⁴⁾、大倉邦彦は一九〇六（明治三九）年、上海の東亜同文書院商務科を卒業後、大倉洋紙店に入社した。その後、一九一二（明治四五）年、社長の大倉文二の婿養子となり、一九二〇（大正九）年に三代目の社長に就任した。大倉は養祖父の大倉孫兵衛と、養父の大倉文二の商売の思想や方針を継承し、大倉洋紙店の発展に寄与したのであつた。⁽⁵⁾また、後述するように、大倉は私財を投じて一九二四（大正一三）年には東京の中目黒に富士見幼稚園を設立した。そして、一九二八（昭和三）年一月には、大倉は郷里の佐賀県神埼郡に女子の教育施設である農村工芸学院を開設し、院主を務めた⁽⁶⁾。この学院の設立目的は、農村の子女に技芸を習得させ、万一の時も経済的に困ることのないよう、職業教育を受けさせて副業を振興させることにあり、しかもそれが郷土に生産的事業を根付けさせるものになると考えたのであった。また学院は全寮制を採用しており、彼らに正しい人生観を教えることも目的としていたのであつた⁽⁷⁾。

そして、大倉は一九三二（昭和七）年には現在の横浜市の大倉山に大倉精神文化研究所を開設した⁽⁸⁾。大倉は所長として研究所の運営と指導にあたり、各分野の研究者を集めて学術研究を進め、精神文化に関する国内外の図書も収集

し、附属図書館も開設した⁽⁹⁾。また、一九三七（昭和一二）年には東洋大学の懇請により第一〇代の同学長にも就任し、二期六年の間大学教育にも携わった⁽¹⁰⁾。

三 富士見幼稚園開設にあたつて

次に、大倉邦彦が富士見幼稚園を開設するにあたり、どのような思いで取り組んでいったのかについて明らかにしておきたい。

大倉邦彦は一九二四（大正一三）年に東京の中目黒に富士見幼稚園を開設したのであるが、その理由は、「幼児期の学びや体験がその後の人間形成に大きな影響を与えると考え、幼児教育の必要性を唱え」て、「その信念を自ら実現する」ことにあつた⁽¹¹⁾。開設当時、一般には「幼児教育はさほど重視されてはいなかつたが、大倉邦彦は、幼少時代の学びや体験が人間としての基礎を作り、その後の人生に大きな影響を与えると考え、幼児教育の必要性を訴えた」のであつた。大倉は「幼稚園時代の教育は、たゞ記憶として意識的には自覚していないものであつても、潜在的な意識として人間成長の基礎を形成するものではないか、またそのことがかえつて全人的に後年を支配する場合もあるほど重要ではないかと確信していた」のであつた。また、「自らの体験と所信を具体的に子どもに教えることによって子どもの心の情操面を引き出し、おおらかな人間に育てたい」と考えていたのである⁽¹²⁾。このような考え方から、大倉は人間形成の基礎を担う教育機関の実現のために富士見幼稚園を開園したのであつた。このような視点が現在の特別活動の目標に示されるような「望ましい集団生活を通して」子ども達が「よりよい生活や人間関係を築」き「自主的、実践的な」活動のもと、「自己を生かす能力」の育成の実現に向けて取られていたものと考えられる。

富士見幼稚園は一九二五（大正一四）年の四月二十四日付の申請により、当時の東京府から正式に設置の認可を得た⁽¹³⁾。

この富士見幼稚園は東京の目黒の自邸に近い中目黒谷戸前¹⁵の地に建設した。開園当初大倉は園長を務め、保姆は日本女子大学校出身の三人で子どもたちの指導に当たった。園児の定員は五〇名を厳守し年齢ごとに三組に分ける教室構成であった。¹⁶

大倉も「ある時は、慈悲深い母となり、ある時は厳肅な父」のように幼児に「話をしたり、歌を歌つたり、運動会には一緒に走り、遊戯を」するほど積極的に交流し幼児教育にも関わっていたのであった。¹⁷

四 富士見幼稚園の理念

ここでは、大倉が創設した富士見幼稚園の教育理念を明らかにしたい。その精神は、園児募集のチラシ¹⁸にも色濃く表れている。チラシには、「一・其の名の様に心身共に気高く、強く、子供の自然性を培ひ、一・協同一致の習慣を付け、一・幼少の頃から天皇陛下の御恩とみくにぶりとについて、信念を養ふ事に留意し、一・標語は、強く、賢く、親切に」と記されている。富士見幼稚園では標語として「強く、賢く、親切に」を掲げていた。この標語は、富士見幼稚園の教育の柱であり、チラシや園児募集のポスター等に記されている。また別の園児募集チラシ¹⁹には、「伸び行く幼い時代にしつかりと育てることは、やがて大きな樹となり、立派な実を結ばせる基礎となる。富士見幼稚園では完全に危険や悪しき環境から離れた明朗な樂園で、お子様方は自ら善良な経験が習慣づけられ、正しく強い心身が培われることと信じ」というように、幼児教育の大切さが述べられている。また願書受付期間として、「四月五日まで」と記載されている。当時、幼稚園に通う人は増えてはきていたが、少しづつであり、幼稚園の経営は困難であった。そのため、当時の幼稚園の入り口の立て看板は、「隨時入園可」となつており、定員と東京府知事認可の年月日が書かれていた。つまり、随时入園可ということで、隨時やめても構わなかつたのである。²⁰しかし、富士見幼稚園は、受

付期間を設けていた。これは、富士見幼稚園が人気だったためとも考えられるが、幼児が新しい生活を始めるにあたつての配慮のようにも感じられる。つまり、新しい環境のもと、親元を離れ不安な幼児が隨時入つてくることにより、保育としての連続性や生活のリズムが乱れることなどを考慮したものだと考えられる。こうした点にも大倉の子どもたちの心に寄り添う保育の精神が表れていると考えられる。そして、その考えに親も同意しており、さらには学びの大切さを親も理解していくようになる。後述するように、親たちの「富士見学びの会」などが統いていったのも、こうした大倉による教育の重要性が親たちに浸透していったことも大きな要因であつたものと考えられる。

「富士見幼稚園便覧」では、まず「趣旨」が述べられている。⁽²¹⁾そこでは「小学校教育は注視されることが多いが、特に幼稚園時代の教育は潜在意識となつて人間の基礎をなすものであると確信して居ります」とあるように、幼児の教育が如何に重要かということが述べられている。そして「他の幼稚園の形を真似ることを好まず、もつばら信ずるところを具体化してみることに努めている」。また「書籍の空論を避け、子どもの心にどれだけ飛び込みうるか、また、子どもの心をどれだけ自己の心の中に見ることができるかの体験を基礎としている」とも述べている。こうした点からも富士見幼稚園では、他園の真似や本の内容をなぞるだけの教育を避け、園児たちと直接触れ合い、心の中に飛び込むことで得られた理解と体験を基礎とした教育が行われていたと推測できる。「富士見幼稚園便覧」には、「規定一班」として「本園は幼稚園令及び同施行規定に従い、幼児の心身を健全に発達せしめ、善良なる性情を涵養し、家庭教育を補うを以て目的と致します⁽²²⁾」と幼稚園の目的も示されている。これは前述した「幼稚園令」の幼稚園の目的に沿う形で記されていることがわかる。「分級」に関しては、「園児の発達状態に従い、松、梅、桜の三組に分けていふ」。さらに「保育項目」においては、「運動、遊戯、唱歌、手技、觀察、談話、躾方、診療」としており、「幼稚園令」の保育内容の「幼稚園ノ保育項目ハ遊戯、唱歌、觀察、談話、手技等トス」とされ、「等」という部分が「運動、躾方、

診療」という項目として富士見幼稚園では行わっていたことがわかる。また、「入園料一円」、「保育料一か月三円、（但し八月分は不要）」とある。当時の幼稚園は設置者の制限もなく、設置に対する必要な資格もなかった。そのため、私立幼稚園の設置者・園長は多種多様で、寺院教会の主管者、教員退職者、童話家、家庭婦人等、様々であった。²³⁾また、当時の他の幼稚園は大変小規模で、六〇名程の園児のみの幼稚園も多かった。従つて設置者の本業を別にてもつている場合が多かった。また、富士見幼稚園は八月に保育を行わないことから八月は保育料を徴収しないことが記されているが、多くの園では八月に「一・三日子どもを集めて、夏季保育をし、保育料を徴収する園もあつた。²⁴⁾「規定一班」の最後の項目としては「保護者会 努めて家庭との連絡を計り、毎月保護者会を開いて、保育上の打合せを致します」とある。このように保護者との連携を密にして保育を行っていく姿勢が読み取れる。

五 富士見幼稚園の保育の実際

次に富士見幼稚園で実際どのような保育がなされていたのか。ここで保育案から見えてくる保育内容とともに日誌から見えてくる実際の保育内容を分析したい。まず一九三八（昭和一三）年の保育の実態、一九四〇（昭和一五）年の保育案を分析する。次に、一九四二（昭和一七）年の保育の実態を分析する。当時の日本の状況は、一九三一（昭和六）年に満州事変、一九三三（昭和七）年に上海事変が起こり、この頃から大正デモクラシーの影響による自由保育的な幼稚園教育に対して、少しずつ戦時色が加わってきていた。一九三五（昭和一〇）年に開かれた「全国幼稚園関係者大会」第六回大会では「幼児に国民精神を涵養せしむべき適切なる方法如何²⁵⁾」という協議事項に対し、名古屋保育会から保姆の実践すべき事項が提案された。保姆の実践すべき事項としては、皇室尊崇、聖旨奉載、愛国、敬神崇祖、勤儉奉仕が示され、国民精神の涵養が取り上げられ、次第に幼稚園にも戦争色が現れてきた。そして一九三

七（昭和一二）年には日華事変が起り急速に戦時体制に入り、国家意識が強調され戦争を遂行する方策が考えられた。さらに一九四一（昭和一六）年には太平洋戦争が起り、国民学校制度が発足し、教育界に戦時国家による要請が強く反映された。こうした状況のもと富士見幼稚園の保育がどのような変遷を辿つていったのかを分析する。

（一）一九三八（昭和一三）年の保育の実際

富士見幼稚園の一九三八（昭和一三）年の四月の日誌⁽²⁷⁾には、「談話」として三匹のこぶた、うづらの話、紙芝居、「唱歌」はチユーリップ、桃太郎、はとぼっぽ、兎と亀、こいのぼり、たんぽぽ、「観察」では草花、新芽、あめ、チユーリップ、「手技」では塗絵、自由画、積木、チユーリップの貼り絵、カードはり等、「遊戯」では自由遊びとしてバスケットボール、なわとび、おすべり等が挙げられている。「観察」の項目に関しては、園内や通園路にある自然を取り上げることが多かった。さらに別の日の日誌には「会集」という時間を設けて大倉のお話の時間を設けている。また「唱歌遊戯」と題してチユーリップ、こいのぼり等が挙げられている。また、新年度の四月の日誌であることから、遊具の説明、注意事項等が述べられており、集団生活を意識させた時間も設けられていたと考えられる。入園式の日の記述には「保護者に伴われ来園。待ち兼ねた幼稚園に入る」とある。保護者も参加したため盛況だった様子が書かれており、保護者と共に入園に対する思いの深さが読み取れる。さらに、五月六日の「開園記念日と端午の節句の催しもの」でも保護者が出席して会が開かれている。⁽²⁸⁾ 入園してから一ヶ月の園児が各組男女に分かれ、歌の披露を行っている。そして、その会に園児は八一名出席（欠席一〇名）し、さらに大人が九〇名も出席している。参加者がとても多く、保護者の幼稚園の保育に対する理解の高さと同時に幼稚園に対しての期待のようなものがあつたようにも考えられる。

保育内容に関して、「遊戯」ではなわとびや「むすんで開いて」といった古くから伝わる遊びや滑り台などの遊具

をつかつた遊び、積み木や砂遊びままごとのようなごっこ遊びなどが行われている。また、「唱歌」の内容は幼児にわかりやすい歌詞のものが歌われ、遊戯と一緒になつたものも多くあつた。例えば、桃太郎、チューリップ等がある。「観察」では、子どもの周囲の自然物を対象に保育の内容が組み立てられていた。そのため、日常の動植物がテーマとして意識的に取り上げられていたと考えられる。そして「談話」の内容は、昔話や童話などが多く取り入れられていた。「手技」では、恩物をそのまま用いることは少なく、積み木、ぬり絵などが盛んに行われていた。

このように大正期から昭和初期における保育内容と指導の特徴としては、小学校教育の分野で台頭した新教育運動の影響を受けながら、自由保育・生活保育などの新しい教育方法を更に発展させる努力が行われている点である。そのため、園の特色や地域の特徴を生かして保育内容が構成されていたことが明らかとなつた。

(二) 一九四〇(昭和一五)年の保育案^⑩

一九四〇(昭和一五)年三月一一日～六日の保育案をみてみると、保育項目として挙げられている項目は、談話、観察、唱歌、遊戯、手技、躰(附、衛生)の六項目であつた。そのうち、観察では、水仙、ねこやなぎ、椿、沈丁花などの生活に身近な草花を取り上げ、季節を感じる環境を大切に考えた項目を取り上げている。唱歌では、時代を反映してか「兵隊さん」などがうたわれている。遊戯に関しては、唱歌と連動した形で行われていることがわかる。手技では、自由画、折り紙、ぬり絵、積み木などを手を大きく使うことと共に、細かい作業などを取り入れていることがわかる。躰では、所持品の整理や玩具は使用後、元の場所に収めることや室内的清掃が挙げられている。これらは、学年末といふこともあり次年度へのつながりも意識しているものと考えられる。

(三) 一九四二(昭和一七)年の保育案と保育の実際^⑪

まず、資料の年代を確定するためにいくつかの項目、行事に焦点を当ててみることとする。はじめに、一九四二(昭

和一七)年、一九四四(昭和一九)年の日誌と同じような保育項目で保育案がたてられていることから、一九四二(昭和一七)年から一九四四(昭和一九)年の保育案であると推測することができる。次に保育内容に関してだが、一九四〇(昭和一五)年には記載のなかつた保育項目が書かれている。さらに、第二週の火曜日が七夕祭りとなつていてから、一九四二(昭和一七)年のものであるという可能性が強いと考えられる。そして、八日の行事に焦点を当てることにした。富士見幼稚園の資料には八日に「大詔奉戴日」の記載がある。この「大詔奉戴日」とは、一九四二(昭和一七)年一月から終戦まで実施された国民運動で、大東亜戦争開戦の日の一九四一(昭和一六)年一二月八日に「宣戰の詔勅」が公布されたことにちなんで、毎月八日に設定されていた。富士見幼稚園の史料には、当史料の始めである七月には行われておらず、八月は夏休み、九月には記載がないが、一〇月には記載があり、一一月は八日が日曜日であったことから記載がないが、一二月、一月、二月には大詔奉戴日の行事を行つていたことが明らかとなつた。この「大詔奉戴日」は、松本幼稚園の記録にも記述が見られ、毎月八日に行事が組み込まれている。長野県松本市の松本幼稚園の場合は、太平洋戦争の話を園児たちにした後、松本神社へお参りをしたり、陸軍墓地に参拝している。一九四二(昭和一七)年一二月七日の記録では、七日に大詔奉戴日の話をし、八日には日の丸弁当を持参し、^{〔32〕} 松本神社で祈願をし陸軍墓地に参拝後、塩竈神社で日の丸弁当を食べている。^{〔33〕} このように、松本幼稚園が戦前より行つてきた園外保育も戦争と関わりを持つようになつた。そして、以前は「良い子になりますように」と祈願していた子どもたちが「日本の国が戦争に勝ちますように」、「兵隊さんが元気で闘つてくれますように」といったものに変化していった。このように戦争による影響は保育内容に対しても大きかつたと考える。

一九四二(昭和一七)年の週案^{〔34〕}の保育項目では、月曜日は鍊成、火曜日は絵彫、水曜は音感、木曜は神話、金曜は遊戯、土曜は鍊成であった。案では年長クラスの松と竹、年少クラスでわけられており、朝の九時から九時半までは

「朝の行事」として体操と神拝を毎日行っている。九時半から一〇時まではクラス単位で案がたてられている。更には、男女で行う内容も異なつてることがわかる。男児は駆け足、番号お返事を九時半から一〇時半まで「鍊成」として行つてゐるのに対して、女児は作法として九時半から一〇時まで「座布団のすすめ方」をし、一〇時から一〇時半までは伸よく柔軟運動を行つてゐる。また、一〇時半から一時は男女ともにぬり絵をし、一一時から一時半までは戸外となつてゐる。火曜日をみると七夕の仕度という項目が出てくるが、これは手技のなかで行われており、おそらく七夕飾りをつくつたものと考えられる。そして、うまく時間帯を調整して、材料を共有して使つてゐることがわかる。水曜日の唱歌では、全クラス合同で園歌や時計、お馬、を歌つてゐる。木曜は七夕さま、も歌つてゐる。童話はありのお話を、年長は合同で、年少は別のプログラムが構成されている。年齢により成長を意識してのカリキュラム構成になつてゐると考えられる。

次に、富士見幼稚園における一九四二（昭和一七）年一一月三〇日（資料一）から一二月二日（資料三）までの実際の保育内容⁽³⁾を中心には、どのように保育が行われていたのかをみていきたい。

資料一・保育日誌（昭和一七年一一月三〇日月曜日）

年長組	鍊成..体格検査 体重、身長、胸囲
年少組	作法..お取次ぎの仕方..新園舎に於て

律動…お遊戯 もみじ、ゆりかご、スキップ

鍊成…幼稚園の周辺をお散歩。

朝のから風も吹かず暖かいので体格検査を実施した。

厚着の子供が多いのには大分おどろかされた。家庭への注意を促す様にと稲葉先生仰られる。お作法は新園舎に於て実施され玄関を使ってやつた。

出席九七 欠席二〇

日誌の「鍊成」という項目に関してだが、富士見幼稚園の指導案には毎週月曜日に「鍊成」が掲げられていた。この背景として考えられることは、一九三七（昭和一二）年一二月に内閣直属の諮問機関として教育審議会が設置されたことである。そして、同審議会は教育の根本理念を「皇國ノ道」におき、皇国民の「鍊成」を教育の目的としている。さらに一九四一（昭和一六）年三月には「国民学校令」が公布された。その第一条に「皇國ノ道ニ則リテ初等普通教育ヲ施シ國民ノ基礎的鍊成ヲ為スヲ以テ目的トス」とあるように、ここでも「鍊成」が目的とされている。こうした背景が幼稚園の保育内容にも影響を及ぼしていたものと考えられる。

資料一 保育日誌（昭和一七年一二月一日火曜日）

年長組

絵…リンゴ・みかんの写生をする。

手技・古葉書利用 やしの木、丸木船
年少組

絵・リンゴ・みかんの写生

手技・キビガラ細工 飛行機

峯先生御来園になりリンゴとみかんの写生をご指導頂いた。寒さに向つて風邪その他の御注意が朝礼の後、行はれる。うがひをすること、コップをゆすぐこと等。キビガラ細工では飛行機を造る。

出席九九 欠席一八

資料三：保育日誌（昭和一七年一二月二日水曜日）

年長組音感 口ニトの書き方
手技 やしの木、お船
年少組
体格検査 身長・体格（重）、胸囲

この日誌では、手技のところで、「古葉書利用」とある。これは戦争の影響から幼稚園でも、物資の不足にともない節約などの内容が重視されていたため、日誌にも改めて記述したものと考えられる。

全員

唱歌

落葉の歌、もみじ、時計さん。

お始りの時間をお始りの時間は十二月一日より当分おそくするとの御通知を園児に渡す。

今日から落葉の歌、お庭でくるくる風に吹かれる落ち葉の観察を先ず、お習ひする。手技は昨日のつづき。

今日も珍しく暖かなので年少組の検査を行ふ。

出席九十五 欠席二十二

音感という項目が設けられている。音感教育が唱えられてからは、ドレミファソラシンドの音階は、ハニホヘトイロハに改められた。つまり、従来のドミソはハホト、ドフアラはハハイということになつたのである。ここでは「口二ト」との記載があるが「シレノ」を教えたということである。当時、松本幼稚園でも同時期の一九四二（昭和一七）年四月二一日に音感教育を行つてゐる。その日誌では「お母さんの名前はハ。お姉さんの名前はホ。赤ちゃんの名前はト」と、おや指・中指・小指を使って、単音のハホトを覚えさせようと試みている。また同年九月四日の音感教育では、「ハホト…拍子、ハハイ…キラキラ星、口ニト…汽車、とそれぞれ絶対音階について、動作で表して覚えさせよう」と苦心している様子が窺える。

このように、保育の中で音感教育を行つたのは正しい意味での音感覺を養うというよりも、戦時中、この教育は機械の故障の発見やその他の軍事目的のため利用奨励されたのである。例えば、絶対音階が識別できるようになると、敵機の来襲音を聞き分けられるなどということで絶対音階の訓練がなされた。³⁷ また一九四〇（昭和一五）年、徳島市

立新町幼稚園の新居礼子の日誌にも「当時の保育内容は、音感教育が盛ん⁽³⁸⁾で」あつたが、この音感教育は情操教育のためではなく耳の訓練をするためであつたと記述がある。つまり飛行機の敵味方などを音で聞き分けるためであり、同時に平衡感覚の訓練も行つてゐるのである。このように幼稚園における保育内容にも戦時色が色濃くなつてきていることがわかる。

岡山県女子師範学校附属幼稚園では、一九四一（昭和一六）年に保育の目的として「健全ナル精神」「躾ノ重視」「皇國民ノ鍊成」などが加えられ、保育の方針としては「皇國ノ道ノ修練」「国民的情操ノ素地ヲ培フ」が強調されている。保育方法に関しても戦争の影響が色濃くあらわれ、一斉保育、合同保育、集団訓練、動的で敏速な動きを促すような保育が多くなつていつた。本土空襲の激化にともなつて幼稚園では空襲に対する防空訓練が実施されたところもあつた。⁽³⁹⁾

六 戰争末期の富士見幼稚園

大正デモクラシーの影響による自由主義的な幼稚園教育に対し、前述のように戦時色が加わつてきたが、さらに一九四一（昭和一六）年には国民学校の制度が発足し、教育界に戦時国家による要請が強く反映されるようになった。このため、幼稚園の保育課程や保育方法もその影響を受けた。⁽⁴⁰⁾

戦局が一層非常事態となるに伴い、幼稚園では警報が出るたびに幼児を避難させ、保育ができないばかりか、その安全を確保することが困難な状況となつてゐた。他方、幼児を持つ家庭の中には、出征軍人の家族あるいは遺族で母親が就労しなければならない者も少なくなかつた。これらに対処するために、東京都は一九四四（昭和一九）年五月「公私立幼稚園非常措置二対スル善後処置並ニ保育施設ノ整備ニ関スル件依命通牒」という通達を出した。

富士見幼稚園には、一九四四（昭和一九）年四月一五日付けで通達があつた⁽⁴¹⁾。その内容は、私立幼稚園設立者宛てで「拝啓 幼稚園經營ニ関シ御協議申上度候ニ付左記ニ御參集被成下度候」ということで、東京都教育局長の生悦住求馬からの通達であった。書面には「一・日時 昭和一九年四月十九日（水）午後一時 一・場所 京橋区泰明国民学校」とあつた。この泰明国民学校では、幼稚園に対して閉鎖命令が伝達され、集まつた幼稚園設置者、園長に閉鎖命令書が配られたのである。⁽⁴²⁾ この通達により、公立、私立幼稚園などの保育施設が全面的に休止されることとなつた。

一九四四（昭和一九）年四月一九日に「富士見幼稚園設立者 大倉邦彥殿」宛てで東京都教育局から、封書が届いている⁽⁴³⁾。書面には、「東京都次長 松村光暉」とあり、「私立幼稚園設立者殿」となつていて。その内容は「公私立幼稚園非常措置ニ関スル件」として、「緊迫セル現下ノ情勢ニ鑑ミ幼稚園ハ当分ノ間其ノ保育事業ヲ休止セラルル様速ニ御措置相成度此暇依命通牒候也」とあり、幼稚園は保育事業の休園を求められている。しかし「追而現ニ必要ナル託児施設ト認メラルモノニシテ引続キ戦時託児所トシテ經營セムトスル場合ハ當該園長ヲ經由シ其ノ旨申相成度尚此ノ際幼稚園保姆等ニシテ国民学校教員タラント希望スル向ニ付テハ審査ノ上採用致度ニ付四月末迄ニ履歴書相添ヘ区役所教育課又ハ都教育局教育第一課へ申出相成様致度」とある。つまり、時局の重要な産業に従事している家庭や母親が就労している家庭などで保育条件が欠如または不足しているため、その乳幼児の保育を行う保育施設に限り戦時託児所として開設することが認められたのである。東京都では一九四四（昭和一九）年五月に「戦時託児所設置基準」が制定され、午前六時から七時まで保育を行うことができたのである。

このように幼稚園に対して休園することが急速に進められていたことがわかる。富士見幼稚園では四月二五日の日誌に休園になるかもしれない旨が記載されている。そして、四月二八日に休園申請書が受領され一九四四（昭和一九）年五月七日をもつて富士見幼稚園は閉園を余儀なくされたのである。

戦時託児所に変更した感應幼稚園では、東京都へ一九四四（昭和一九）年七月一日付けで変更申請を行つてゐる。⁽⁴⁶⁾

「先般幼稚園休園ノ件東京都次長通牒ヲ以テ御指示相成候ニ付感應幼稚園ヲ左記ノ通一時休園仕候間此度及報告候也」として、幼稚園の保育事業を休園する年月日を一九四四（昭和一九）年七月末日としている。そして、建物は「感應戦時保育所ニ於テ使用ス」とし、感應幼稚園は戦時託児所に変更して、保育を行うことになった。

このように戦時下にあつた幼稚園は、休園・閉園・託児所へと転換していくのである。つまり、戦争末期においては幼稚園で保育事業をするということは難しい状況であり、避難や退避、託児的な働きが多くなつていつたと考えられる。

富士見幼稚園は休園になる直前まで普通の保育を行つており、一九四四（昭和一九）年の段階でも園児募集を行つてゐる。その締切日の一九四四（昭和一九）年二月二九日の応募数は八七件であった。⁽⁴⁷⁾ そしてその入園希望者に対し選考を行つており、合格は二年保育五四名、一年保育一二名、不合格五名、不参加一六名という結果であつた。

さらに一九四四（昭和一九）年三月三日にはひな祭りが行われ、七七名が出席している。⁽⁴⁸⁾ ひな祭りのためにひな壇を設置し紙芝居や桃の節句の遊戯をし、帰り際には前日作製した紙びなお土産が渡されている。本来は保護者を招いて盛大に催すはずであつたが、三月一日の日誌に「風雲急なる昨今的情勢下に一億決戦のおり、内輪にて古式ゆかしきこの行事をして子供達に日本精神を味わせる事とす全員紙びな作りをなす」とあり、ひな祭りは盛大に行わないことになつたのである。また一九四四（昭和一九）年三月二三日の卒園式では式次第に則り、男児二九名、女児二八名、合計五七名の園児が卒園している。⁽⁴⁹⁾ さらに、一九四四（昭和一九）年四月八日には入園式が執り行われている。⁽⁵⁰⁾ 園児百名（欠席一二名）に対して、保護者は百名余りが出席している。⁽⁵¹⁾ 式の後、園長の大倉より保護者に対しての講話があるが、その内容も園の性格、入園に関しての心構えといったものであつた。式において戦時下にあるため変化

した様子はないようである。また五月五日には休園式を行つてゐる。⁽⁵²⁾ そこでは、神話「海幸山幸」や唱歌「チューリップ、春、鯉のぼり、兵隊さん」先生方による人形芝居「雀のお宿」が催されていた。出席園児数は九十四名（欠席一六名）であり、母親も多く参列していた。そして「お母様方も非常に残念がつて居られました」とあり、母親たちが長期休園を惜しんでいる様子が窺える。

前述のように戦時色が濃くなつていった状況のもと、富士見幼稚園では保育内容や保護者との関係等に他の幼稚園では見られない特徴的な部分があつたことが読み取れる。これは富士見幼稚園の教育方針でもある「子供の自然性」を重視した保育を行つていた結果とも考えられる。さらに、前述した「富士見幼稚園便覧」の「趣旨」でも述べられていたように他の幼稚園の形を真似ることを好まず、信じるところを具体化してみると努め、子どもの心に寄り添つた保育を行おうとしたものと推察できる。そのため、積極的に戦争の話や活動を取り入れるといったことは他の園と比べて少なかつたものと考えられる。

以上のように、大倉は幼児の教育に力を注いでいることがこれらのことから理解できる。さらに、大倉が如何に教育を重視していたのかが窺えることとして、園児の母たちのための成人学校を開いたり、卒園した子どもたちを対象にした学校も開いたりしていることである。

次に、「富士見学びの会」と「富士見日曜学校」についてみてみたい。

七 「富士見学びの会」と「富士見日曜学校」

大倉邦彦は富士見幼稚園の他にも、良い母親を育てるための成人学校である「富士見学びの会」や、卒園した子どもたちを対象にした「富士見日曜学校」も開設している。大倉は「幼稚園経営を通して、自身の目指す精神に相応し

い知識と人格を持った人間の養成と、幼稚園から大学まで一貫した方針で行う総合教育が必要であるという思いを強く抱くようになった^{〔53〕}のである。そこで、以下では、富士見学びの会と富士見日曜学校が開設された経緯と理念について述べる。

大倉は幼稚園教育が始まると同時に、毎月一回、保護者会を開いた。これは大倉が家庭と幼稚園の連絡を図ることを重視したためであった。そして、この会は次第に幼稚園に関係する母親だけでなく、「一般婦人」も参加する会へと発展し、富士見学びの会と言われる母親のための成人学校となつた。富士見学びの会は頻度が増し、毎週一回開催されるようになり、そこでは大倉による講話が約一時間なされ、内容としては主に幼児に関する教育問題や時事問題の解説などであった。また、この富士見学びの会は料理や手芸の講座も設けており、年一回は持ち寄つた品物でパーティーを開催し、収益は貧しい人々に対する奉仕活動も行つていた^{〔54〕}。

富士見学びの会の主な目的を大倉は以下のように述べている。富士見学びの会は、家庭と幼稚園との連絡を密接にすることと、家の中心指導者である「主婦」の内的活動心を養うこと^{〔55〕}という二つの目的の一端を果たすものとして生まれた。その理由は、「主婦」の態度や考えは家庭においては非常に影響力を持つており、また両親が子どもを養育する方針と幼稚園の保育方針とが一致していなくては、家庭においても幼稚園においてもその教育的効果が現れないと考えていたからであつた。大倉は「主婦」が自ら率先して自身の思想と人格の向上と進歩を成し遂げることで、その精神が種となつて生きた教育的使命を果たすことに繋がるとし、それは子ども、ひいては世の中にも大きな影響を及ぼすと確信していた。従つて、幼稚園と家庭は常に連絡を取り、密な関係でなければならないと考えたのである。そして、保育上の研究や相談をするためには母の会が存在することが望ましいとして、この富士見学びの会を設立したのであつた^{〔56〕}。

既に述べたように、富士見幼稚園は一九四四（昭和十九）年に開園に至つたが、富士見学びの会は、戦後においても各々の趣味や子どもの学校の父母会を通じ、名称は変化したものとの会員相互の交流は続けられた。^{〔56〕}これについては、当時の記念写真や回想録などが大倉精神文化研究所に残されている。当時の「主婦」達にとつて富士見学びの会は、親自身や子ども、さらに社会全体に対しても教育的な意義を持っていたのであり、相互の交流という社交的な面から見ても、大変有意義な役割を担つていたことが窺える。

一九二九（昭和四）年になると、大倉は富士見幼稚園を卒園した子ども達の将来を考え、同幼稚園に富士見日曜学校を開設した。この日曜学校は日曜日に開校され、幼い子どもだけではなく中学校卒業までの子どもを対象にしたものであつた。すなわち、満六歳から約一八歳までの子どもを対象とし、日曜の午前九時から一一時半まで、おおよそ塾のようなものであつた。目的としては学校教育の不備を補うためとしていたが、内容としてはその年齢や能力に応じたものであり、そのうち一時間余りは時にはおとぎ話や童謡を題材にして大倉が修養的な話をし、あとの時間は補習授業をするという形式だつた。補習授業には大学生や大学の卒業生が教師となつていて、授業料は徴収せず、教師の大学生も無報酬であった。教師たちの楽しみは散会後に大倉から昼食がもてなされ、児童教育に関する講話を聞くことについたという。尚、同年一一月には日曜学校を母体とした機関誌で、主に児童の教育問題を扱つた雑誌である『心の使』^{〔57〕}も刊行している。

八 大倉邦彦の教育に関する思想——大倉邦彦著『感想』から——

前述したように、大倉邦彦は富士見幼稚園の開設のみならず富士見学びの会や富士見日曜学校といった、教育の対象を児童以外に広げ、その保護者や児童のその後に対してもその教育的支援を行つた。以下では、大倉が教育者に対

してどのような実践をすることを重要なものとして考え、また当時どのような家庭教育が必要であると考えていたのかについて、大倉が綴った『感想』の中から概観してみたい。

大倉邦彦は、「純真な子女の心田を耕すには、其心田に飛び込まなければならぬ。下駄穿きのままや、遠方からは、種子も蒔かれず、培ひもされない」と述べ、教育者というものは子どもに対して真摯に向き合い、自身を投げ出す姿勢が重要であるとしている。さらに大倉は、眞の教育は人格の交換から生れるのであるにもかかわらず、顔さへ見れば教える態度を取りたがる教育者がいることを批判している。⁽³⁹⁾ また、「力車は原動力によつて動かされ、そして原動力を助ける様に」という例を用いながら、「教育者ぶるのは禁物」として教師自身も教育されるものであり、かつ成長するものであることを繰り返し述べている。⁽⁴⁰⁾ さらに、大倉は教育者が研鑽を積むことや誠意と熱意ある教育をすることの重要性も述べている。例えば、教師が生徒に対しても媚びたり妥協したりして、厳格に信じる所を主張したり、涙を流して偽りのない心を吐露する様なことが少なくなったことが、結果として生徒からの尊敬や信頼を失い、「相互に義務と御座なりで、日を暮す」ことになつたと嘆いていた。⁽⁴¹⁾ そして、教育者自身の修養がそのまま教育となると考え、児童は無心にして自然であるため、教育者自身がより自然な子どもの心に合う精神を持てるよう、自由を奪うような態度から脱し、心は自然と児童の心と合流し感化することが大切であると考えていた。⁽⁴²⁾ 大倉は教える者の誠意と熱意は学ぶ者の意気込や努力を誘発するものであるから、教える者はそれらを持つた「発動機」のように働きかけなければならないと述べている。⁽⁴³⁾ この他、「教へ方、話し方、書き方は着物の着こなしや生花みた様に、同じ材料を取り扱つて居り乍ら、大した違ひがある。材料のみに眼がくれるものは、訓練を疎かにする」とも述べ、教育者の訓練の大切さにも言及している。大倉は特に教育者だからといって智徳の完全を要求しているわけではなく、常に不完全から完全へと努力する熱意と誠意こそが教育者にとって最も大切であり、「己を知り、己を養ひ、己を研いた結果其

こぼれが感化であり、教育である⁽⁶⁵⁾」と考えていた。一方で、大倉は教育者になるには前述したような重要な資質というものがあり、下手な料理は如何に材料を並べても食べられないことを例にして、教育者としての資質は人々に与えられた生得的なものであるため、妄りに教育者となるべきでないとも述べている。⁽⁶⁶⁾

また、大倉邦彦は当時広まりつつあった自由教育や子ども中心の行き過ぎた教育を批判して、その過度に放任的な姿勢を罪であるという考えを持っていたようである。大倉は以下のように述べている。「子供の成長を喜ぶ親は、子供が思想的に變つた事を云ふのを聞いて、或は無批判に、それが子供の進歩だと喜び、或は心配しながらも、社会感化の強さに押されて、其儘放任する。かくして家庭教育を無力にし、破壊に導きつつある」⁽⁶⁷⁾。また、大倉は親は時には「主」と「従」との立場を兼ね備える必要があることも考えていた。例えば、父が子どもの為に馬となつて子どもを喜ばせ、相撲の相手となつてはことさらに負ける場合は、子どもが「主」で父は「従」である。しかし教育的に見れば、馬や力士となる父は「主」であり子どもは「従」である。このような「主従の立場を兼備」することが成功の道であることを述べている。そして、親は子どもと共に朝夕の行事を行つて生活基準の共通を保つ事が、最も良い家庭教育であると述べている。⁽⁶⁸⁾ このように大倉は、親は子どもに對して主従の関係を兼備し、朝夕を共にして自身も変化しながら子どもを躊躇なればならず、ただ子どもを放任したり心配するだけのものになるべきでないと考えていたのであった。大倉が良き親のための成人学校である富士見学びの会を作つたことは、前述したような考えがあつたためであり、「子供は親の延長であり影である」からして、「其元を直さず、其の本体を正さずして、子供にのみ求めるのは、無理な望みである⁽⁷⁰⁾」と考えていた。すなわち、子どもの教育は親自身の教育に立ち返つて行われる方が早道であるという思いがあつたためである。

さらには、大倉は教育のねらいについては体験的指導であるとし、教育の基礎については、欠点を気にしてそれを

取り去ることに努めるよりも、芸術家が作品を創作する前にまず理想表象を意識する様に、望ましい状態を描いて念願する方がより確実な効果が得られると考えていた。⁷² すなわち、教育においては子どもの欠点にばかり注視してそれを取り除くことに意識を置くよりも、望ましい理想の全体像に向けて教育することを重視していたのであつた。そして、「正しい確信と深い信念とは無言の中に人を感化する。是が眞の教育であらねばならぬ。教授法や、訓育論や、管理法は抑々末節だ」と言及し、方法論などの前に人の考え方や情緒を変化させるものがあることを指摘している。

この他、大倉は『感想』の中で女子の可能性にも言及し、「国民力の増大を望むなら男子よりも遙に女子に可能性が多い。永い間被圧階級として取扱はれ、力を伸す余地がなかつた女子は人口の半数を占めて居るから、此處に眼をつけなければならぬ」とも述べている。⁷³ 既述したように、もとは子どもの教育にはまず母親から固めなければという考え方のもとに作られた富士見学びの会だったが、背景には大倉がこのような女子の力の重要性も認識していたことも関係していたのではないかと推察される。この女子の力に関する考えは、既出の女子のための教育施設である農村工芸学院の設立（一九二八年）へと繋がっていると考えられる。

おわりに

以上、本論文では、一九二四（大正一三）年から一九四四（昭和一九）年まで、東京中目黒にあつた富士見幼稚園の創設者である大倉邦彦（一八八二—一九七一年）の教育理念と教育内容について考察した。ごく簡単にまとめると、富士見幼稚園の教育内容は、当時の幼稚園令に示される保育内容を補いつつも、富士見幼稚園の独自性がみられ、富士見幼稚園の教育理念であつた「心身共に気高く、強く、子供の自然性を培ひ、協同一致の習慣を付け」「強く、賢く、親切に」という標語の表す保育を行つていた。

また、戦時中という特殊な保育環境の中においても、富士見幼稚園の根幹にある保育は大きくは変化することはなく、子どもたちの理解と体験を基礎とした教育が行われていたことが明らかとなつた。それが大変よく現れていたのが、閉園間際の一九四四（昭和一九）年の年中行事であつた雛祭りや卒園式などである。これらは特別活動的視点からみても重要な保育内容であつたと考えられるが、戦時下の当時においても、富士見幼稚園は子どもの成長に視点を当て、確固たる信念を持つて保育を行つていたことが窺い知れた。その上、特別活動的な教育内容も、富士見幼稚園における保育の実際に現わっていた。富士見幼稚園の保育においては、子どもたちが創意工夫しながら行動したり、目標を達成したり、仲間同士で助け合いながら体験的な活動したりするような主体的で自由な教育活動がなされていったことについても明らかにすることができた。

また、大倉邦彦はすべての人には一生の間で成すべき使命事業があると考えていた。この信念を自ら実現するためには、諸々の教育機関や研究所を創設したのであつたが、特に大倉は幼児期の学びや体験が人間形成に大きな影響を与えると考え、幼児教育の重要性を確信していた。このことが富士見幼稚園創設につながり、そこでの教育方針も大倉の考えが大きく反映されていた。すなわち、大倉は教育者というものは子どもに対して熱意と誠意を持って真摯に向き合うことが大切であり、しかも教育するだけではなく教育されるという学び合いの姿勢や体験的指導を強調していたのであり、このことは本論文中でも確認した。さらに大倉の教育に対する熱意は、幼稚園設立のみならず成人のための学校や卒園生を対象にした学校も開設したことによく表れていると言えるが、本論文で明らかにしたように、大倉は子どもの教育のためにも親、特に母親の教育が大切であると強く考えており、また男子のみならず女子の力も積極的に社会で發揮させるべきであると考え、女子教育も重視していたのであつた。

一九三二（昭和七）年から現在にまで続く大倉精神文化研究所も、以上のような総合教育が必要であるという大倉

の思いが契機となつてその実現へと繋がつていると考へる。

本論文では、大倉の教育理念とともに、富士見幼稚園の保育内容を中心に昭和初期の保育の実際について考察を加えたが、今後の課題としては、東京にある富士見幼稚園以外の幼稚園や地方の幼稚園にまで検討対象を広げ、昭和初期の保育の実際を考察したいと考える。

注

- (1) 倉橋惣三、新庄よしこ『日本幼稚園史』、臨川書店、一九八〇年、一六二—一六四頁。
- (2) 文部省『幼稚園教育百年史』、ひかりのくに、一九七九年、五六頁。
- (3) 同前書 一五一頁。
- (4) 大倉洋紙店は、数回の合併や会社名変更を経て、二〇〇五（平成一七）年に「新生紙パルプ商事株式会社」となり、紙・板紙・フィルムを中心には、国内外に幅広く販売する紙の総合商社として現在に至つている。
- (5) 財団法人大倉精神文化研究所編『大倉邦彦伝』、財団法人大倉精神文化研究所、一九九二年、二八一三五頁。財団法人大倉精神文化研究所編『講演集 大倉邦彦と精神文化研究所』、財団法人大倉精神文化研究所、二〇〇二年、五四一五六頁。
- (6) 院長は邦彦の実兄の江原貞一が務めた。尚、農村工芸学院は一九三一（昭和六）年四月に国民女子工芸学院、一九三三（昭和八）年四月に国民家政学院と改称した。一九三八（昭和十三）年に廃校となつた。
- (7) 前掲『大倉邦彦伝』五五・五六頁。
- (8) 一九三六（昭和一一）年に文部省所管の財団法人として認可された。
- (9) 前掲『大倉邦彦伝』八〇一八五頁。
- (10) 同前書 一四九頁。
- (11) 林宏美「展示会「「ももたろう」が「モモタラウ」だつたころ—昭和のはじめの幼児雑誌—」（財団法人大倉精神文化研究所

- 編『大倉山論集』第五八輯、財團法人大倉精神文化研究所、二〇一一年)三四一頁。
- (12) 大倉精神文化研究所「資料展「信念の人、大倉邦彦」」(財團法人大倉精神文化研究所編『大倉山論集』第五七輯、財團法人
大倉精神文化研究所、二〇一一年)三三二四頁。
- (13) 前掲『大倉邦彦伝』五一頁。
- (14) 東京都公文書館所蔵、「指令案(幼稚園設置の件認可)」(簿冊名「私立学校冊の16」)、請求番号306—G5—6
- (15) 前掲『大倉邦彦伝』五一頁。
- (16) 近隣の発展に伴い、入園希望者の増加ということもあり、昭和一七年に定員を百名に変更。
- (17) 前掲『大倉邦彦伝』五一頁。
- (18) 公益財団法人大倉精神文化研究所所蔵、研究所沿革史資料八二三二一一〇七
- (19) 公益財団法人大倉精神文化研究所所蔵、研究所沿革史資料八二三五一一〇八
- (20) 青柳義智代著『私立幼稚園の昭和史』、フレーベル館、一九八五年、一八・一九頁。
- (21) 公益財団法人大倉精神文化研究所所蔵、研究所沿革史資料八二三五一一〇
- (22) 公益財団法人大倉精神文化研究所所蔵、研究所沿革史資料八二三五一一〇
- (23) 前掲『私立幼稚園の昭和史』、十三頁。
- (24) 同前書二〇頁。
- (25) 公益財団法人大倉精神文化研究所所蔵、研究所沿革史資料八二三五一一〇
- (26) 前掲『幼稚園教育百年史』、二五二頁。
- (27) 公益財団法人大倉精神文化研究所所蔵、研究所沿革史資料一五三九
- (28) 公益財団法人大倉精神文化研究所所蔵、研究所沿革史資料一五三九
- (29) 公益財団法人大倉精神文化研究所所蔵、研究所沿革史資料一五三九
- (30) 公益財団法人大倉精神文化研究所所蔵、研究所沿革史資料五三九四

- (31) 公益財團法人大倉精神文化研究所所蔵、研究所沿革史資料五三六七
(32) 公益財團法人大倉精神文化研究所所蔵、研究所沿革史資料五三六七
(33) 松本市立松本幼稚園編『松本市立松本幼稚園百年誌』、五四一頁。
(34) 公益財團法人大倉精神文化研究所所蔵、研究所沿革史資料五三六七
(35) 公益財團法人大倉精神文化研究所所蔵、研究所沿革史資料六四五〇
(36) 前掲『松本市立松本幼稚園百年誌』、五三七頁。
(37) 同前書 五三七頁。
- (38) 日本保育学会編『日本幼児保育史』第四卷、フレーベル館、一九七一年、一四八頁。
(39) 日本保育学会編『日本幼児保育史』第五卷、フレーベル館、一九七四年、九二・九三頁。
(40) 前掲『幼稚園教育百年史』、二五三頁。
(41) 公益財團法人大倉精神文化研究所所蔵、研究所沿革史資料一六二〇一一四
(42) 前掲『私立幼稚園の昭和史』、四四頁。
(43) 公益財團法人大倉精神文化研究所所蔵、研究所沿革史資料一六二〇一一三
(44) 公益財團法人大倉精神文化研究所所蔵、研究所沿革史資料六四五〇
(45) 公益財團法人大倉精神文化研究所所蔵、研究所沿革史資料一六二〇一一一
(46) 前掲『私立幼稚園の昭和史』、四五頁。
(47) 公益財團法人大倉精神文化研究所所蔵、研究所沿革史資料六四五〇
(48) 公益財團法人大倉精神文化研究所所蔵、研究所沿革史資料六四五〇
(49) 公益財團法人大倉精神文化研究所所蔵、研究所沿革史資料六四五〇
(50) 公益財團法人大倉精神文化研究所所蔵、研究所沿革史資料六四五〇
(51) 公益財團法人大倉精神文化研究所所蔵、研究所沿革史資料六四五〇

- 公益財團法人大倉精神文化研究所所蔵、研究所沿革史資料六四五〇
前掲「資料展『信念の人、大倉邦彦』」（『大倉山論集』第五七輯）三三四頁。
- 〔53〕
〔54〕 同前書 五三頁。
〔55〕 同前書 五三頁。
〔56〕 同前書 五四頁。
〔57〕 同前書 五四・五五頁。
〔58〕 大倉精神文化研究所編『大倉邦彦の『思想』—魂を刻んだ隨想録—』、大倉精神文化研究所、二〇〇三年、七六頁。
- 〔60〕 同前書 七六頁。
〔61〕 同前書 一九三頁。
〔62〕 同前書 一一四頁。
〔63〕 同前書 二八八頁。
〔64〕 同前書 二三三頁。
〔65〕 同前書 二八頁。
〔66〕 同前書 二二六頁。
〔67〕 同前書 一二三頁。
〔68〕 同前書 一四二頁。
〔69〕 同前書 二四一頁。
〔70〕 同前書 二六〇頁。
〔71〕 同前書 三五六頁。
〔72〕 同前書 二四頁。

(73) 同前書 二八頁。
(74) 同前書 四四頁。

【編者付記】本稿は、平成二十七年四月十八日の大倉山講演会における「戦前の幼児教育—大倉邦彦と富士見幼稚園を中心に—」と題した講演の記録を基に、加筆訂正を加えて成稿していただいたものである。